

## 「癒し」に刻まれたミソジニー

— 梨木香歩『西の魔女が死んだ』における「魔女修行」の意味 —

小林 夏美

### はじめに

梨木香歩『西の魔女が死んだ』（以下、本作品と記す）は1994年に楢出版より出版された児童文学作品である<sup>1</sup>。出版の翌年に三つの文学賞を受賞し<sup>2</sup>、2001年に文庫化、2008年には映画化もされた人気を博すロングセラー作品であり、その人気の高さもあってか、出版から20年の間に複数の側面から論じられてきている。しかし、提出された論点がそれぞれ切り離されたままであるために、それらの相関性によって本作品に生じている問題は、いまだ断片的にしか語られていない。そこで本論文では、各論点の相関性を論ずることで、本作品が抱える消失点とその問題性を指摘したい。以下、本論文の位置取りを示すために、既に出されている論点を概観する。

まず、本作品が多くの読者に受け入れられる理由としてよく指摘される、「癒し」に関するものからみていきたい。本作品を、学校になじめず不登校になった中学生のまいが、自然豊かなおばあちゃんのもとでしばらく暮らすなかで気持ちを回復させていく物語とする指摘は多い<sup>3</sup>。この指摘はまいへの「癒し」が必要となる要因を学校に置くものだが、それよりさらに本作品の根幹にかかわるものとして、おばあちゃんの死による衝撃からの回復を指摘する論もある<sup>4</sup>。また、おばあちゃんの暮らしぶりと相まった自然描写の存在も、本作品を「癒しの文学」として受け取る要因として指摘されている<sup>5</sup>。

こうして某かのかたちで本作品に「癒し」を読み込む論は多く、また、「癒し」の施し手としてのおばあちゃん像への評価を伴いつつ、その「癒し」を評価するものは一定数ある。一方、批判的に論じるものも存在する。西山利佳は、本作品の調和的展開が生きづらい状況を変革しない、現状肯定的なものであることを指摘しており<sup>6</sup>、内川朗子も、本作品の「不登校という「問題」の解決は、本人の「成長」に寄りかかって」おり、「子どもに「成長」という名の「適応」を奨励しながら、大人側は何ら意識の転換を行わ」ないままであることを指摘し、「癒し」が根本的な問題解決につながっていない可能性を示唆している<sup>7</sup>。また、高田桂子は本作品の展開がおばあちゃんの「見えざる手」に統御されていることを指摘し<sup>8</sup>、奥山恵

は「魔女修行」に「選民意識」がみられることを指摘している<sup>9</sup>。

以上の論点は「癒し」、あるいはおばあちゃんのもとのまいの回復の鍵となっている「魔女修行」に関して提出されたものだが、これらとは別に、ジェンダーにかかわる問題についても批判的な論点が出されている。ひこ・田中は、本作品を「女を巡る物語」として読み解くなかでママへの扱いに着目し、本作品の「状況は徹底的に母親に不利に働」くように作られており、「ジェンダーイデオロギーを援護しているかのように見え」と指摘し、また他方、そのイデオロギーに自覚的であるからこそ、ママに「これで一切仕事をやめるつもりじゃない」というセリフを与えざるを得なくなっているとも指摘している<sup>10</sup>。また、きどのりこもジェンダーの観点から児童文学を論じるなかで本作品を取り上げ、「この物語は、女は外で働く仕事をせず家を守るものだとする祖母の教えを結局、孫娘が肯定し、作者も肯定する（そうとしか思えない）もの」と述べ<sup>11</sup>、本作品がジェンダーにかかわる問題を色濃く抱えていることを指摘している。

こうして本作品に関し複数の論点・批判点が提出されているが、ここまでみてきたものは、それぞれ相互に参照しあって論じられているわけではない。次にみる沢崎友美、藤本恵によるものは、前述の論点の一部を踏まえた上で論じているものである。沢崎は、西山による「癒し」の現状肯定性、変革への意識のなさへの批判に応答するかたちで、本作品が自己や周囲の状況を実際・物理的に変革して〈書きかえ〉るのではなく、観念的・精神的に〈読みかえ〉るというかたちで変革を描いていると論じている<sup>12</sup>。いま一人の藤本恵は、西山の批判に加え、奥山による「選民意識」の指摘、ひこ・田中やきどによるジェンダー補強的側面への指摘を参照し、それらの妥当性を一定程度認めた上で、本作品はおばあちゃんやママ、パパといった登場人物の考え方・行動を脱中心化していると述べ、それらの批判点の先に「他者との間に境界と対立を生み、まいを苦しめていた自意識の解消と同時に付与された、「その時々」「自分で決める」という新たな主体性」を描いているとして、その点から本作品を評価している<sup>13</sup>。

両者の論は、どちらも読み解きの軸をまいの主体性獲得に置き、本作品への批判が一定程度妥当であったとしても、まいの、周囲の状況を見極め、〈読みかえ〉て「自分で決め」られる主体性の獲得がそうした問題性を弱め得るとみて、本作品を評価している。つまり、沢崎も藤本恵もまいの主体性獲得を他の批判点とは切り離し得るものとして扱い、主体性を得たまいは批判点への中立性を保ち得ると考えているのである。しかし、この二つは本当に切り離せるものなのだろうか。換言すれば、藤本恵は本作品が各登場人物の考え方を脱中心化していると述べるが、ならば、なぜ高田は「見えざる手」の存在を感じ、きどはなぜ、おばあちゃんの教えを

まいと作者が肯定しているものだと思えないのか。ひこ・田中は、本作品がママに自身の考えを語ることが許していないため、「主人公や読み手は、女は家庭を守るべきとの祖母の思想と、母親は「反発」していたのだとの父親の情報だけで判断せざるを得」ないと指摘している<sup>14</sup>。もし本作品の語りの構造にこの力の不均衡がはたらいっているなら、「脱中心化」が説得力をもって展開されているとはいえない。

本論文は、藤本恵のいう「脱中心化」はみせかけに過ぎず、その装いの裏に本作品の問題点とまいの主体性獲得との結びつきが隠蔽されていると考える。そのため次節以降ではそれらの結びつきを論じ、その結びつきの示唆する問題を考察する<sup>15</sup>。次節では「癒し」の構造を再度検討し、そこにおばあちゃんとまいの間の力の不均衡があり、その不均衡の「自然」化のために「成長」という消失点<sup>ミソジニー</sup>が作られていることをみる。第二節では、「魔女修行」にみられる愛の限定化が女性蔑視を伴う「母」の再生産を示すものであり、その過程が前述の消失点を支えとして無根拠のまま必然化されていることを示す。そして第三節では、「癒し」と「母」の再生産の結びつきを再考察し、その結びつきをひらく可能性が「魔女」からのずれを忘却する過程を「成長」に刻み込んでいる点にあることを示したい。

## 1. 「癒し」の構造

### 1) 自然に従ったものとしての「癒し」

まず、「癒し」の構造を検討する。本作品は、おばあちゃんの危篤を知り、ママの車でおばあちゃんの家に向かう中学三年生のまいが、おばあちゃんのもとで暮らした二年前のひと月ほどを思い出す、という回想を用いた枠物語となっている。回想部分をみてみれば、冒頭では、おばあちゃんのもとへ赴いたきっかけが、学校が「苦痛を与える場でしかな」(8) かったことによる「登校拒否」(10) であることが語られ、これに対応するように、終盤ではまいが学校に通うようになったことが描かれている。直接的な登校再開のきっかけは転校とされているものの、転校の決断やその後の学校生活において、おばあちゃんがひと月の暮らしのなかでまいに施した「魔女修行」が強い影響を与えていることを考えれば、おばあちゃんが登校再開に果たした役割は大きいといえる。従って、回想部分における展開軸は、まいが学校とのかかわりのなかで抱えた「傷」への、「魔女修行」を通じたおばあちゃんによる「癒し」にあると考えられる。本作品を論ずるものに、展開軸としてまいの「登校拒否」からの回復を読み込むものが一定数あるのも、それゆえと考え得る。

しかし、回想部分冒頭をより詳細にみれば、「学校」による「傷」のほかに、ママがパパへの電話のなかでまいのことを「扱いにくい子」「生きていきにくいタイプの子」(10) といい表したのを耳にして、気持ちを沈ませるまいの姿も描かれている。また、作品後半では、かつてパパに「人は死んだらどうなるの」(119) という疑問をぶつけたとき、「死んだら、もう最後の最後」(121) という解釈をきかされたことで受けた衝撃を、まいがずっと抱えていたことも明かされる。おばあちゃんとかかわりを通して、まいがこれらの衝撃から気持ちを回復させる姿も描かれていることから、回想部分の展開は、きっかけとして描かれる「学校」による「傷」をベースとして、おばあちゃんのもとへ赴く以前にまいが抱えた計三つの「傷」への「癒し」が主軸となっていると考えた方が良いだろう。

この点に関し、沢崎友美は、特に学校によるものと死の解釈によるものの二つを重視しながら三点ともに触れ、まいはおばあちゃんの「魔女修行」によって「観念的・精神的なレベルでそれらを〈読みかえ〉ようと」し、乗り越えようとしたと論じている。沢崎が挙げている、本作品にみられる具体的な〈読みかえ〉の操作——おばあちゃんが折に触れてまいを褒め、存在を肯定することによって促される「自らの定義の〈読みかえ〉」、転校の意味の「敵前逃亡」から「適切な場所へと移動すること」への〈読みかえ〉、そして存命中におばあちゃんがまいに話し、死後のラストシーンでその「証拠」が示される、死の意味の「消滅」から「魂の肉体からの脱出」への〈読みかえ〉——は、どれもがまずおばあちゃんによって提示されていること、そして、その〈読みかえ〉の可能性が視野に入ることによってまいが気分を明るくさせていることを考えれば、それぞれが先に挙げた三つの「傷」へのおばあちゃんによる「癒し」と考えられる<sup>16</sup>。

「癒し」の対象とされているこれら三つの「傷」は、ママやパパの都市的ライフスタイルや「学校」の示唆する近代性が示すように、近代的な都市生活によって受けたものとして描き出されている。藤本恵の指摘する、本作品の「二元論に基づく分かりやすい対立的な項目」立てを考慮するならば<sup>17</sup>、まいは、本来性<sup>ネイチャー</sup>を傷つけるものとしての都市生活の近代性を「傷」が癒される舞台としての「田舎」暮らしの「自然」<sup>ナチュラル</sup>さと対比させるべく、都市の近代性によって傷つけられた者、回復されるべき「傷つけられた自然」<sup>ネイチャー</sup>として表象されているといえよう。そしてこの二項対立的構造により、まいの「傷」への「癒し」の成立（傷つけられた「自然」の回復の達成）を描くことが、ママやパパのライフスタイル・考え方より、おばあちゃんのものの方が本来的で「自然」だと読者に印象づけることへとつながっている。この都市／田舎の二項対立的構造に、しばしば指摘される本作品の豊かな「自然」描写が相まつことで、おばあちゃんのもとでの「癒し」は、疑い得ない自然<sup>ナチュラル</sup>に従ったも

のとして差し出されているのである。

## 2)「癒し」の入れ子化

この「癒し」の「自然」<sup>ナチュラル</sup>さを考えるにあたって重要なのは、沢崎のいう〈読みかえ〉にはおばあちゃん<sup>の</sup>の先導性がみられ、その先導性によって、まいはそうのように〈読みかえ〉るよう促され、導かれているという点である。ここには、まいよりよく物事をみることができ、より広い視野に立って現状のまいを位置づけることができる、おばあちゃん<sup>の</sup>の優位性が読み取れる。高田桂子は、本作品におばあちゃん<sup>の</sup>の「見えざる手」が強くはたらいっていることを指摘し、「まいが自分で決断しているようでありながら、すべてはおばあちゃんの手によって導かれていた」と述べているが<sup>18</sup>、この指摘通り、「癒し」の「自然」さの裏には「見えざる手」がはたらいしており、「癒し」の構造にはおばあちゃんを優位に置く力の不均衡が刻み込まれているのである。

しかしその一方、本作品は「見えざる手」へのまいの気づきと抗いを描き込んでいる。パパが示した転校の話を受け入れるかどうか迷うまいに、おばあちゃんが「魔女は自分で決めるんですよ」(172)と釘をさしつつ「自分が楽に生きられる場所を求めたからといって、後ろめたく思う必要はありませんよ」(173)と述べたとき、まいは「おばあちゃんはいつもわたしに自分で決めろって言うけれど、わたし、何だかいつもおばあちゃんの思う方向にうまく誘導されているような気がする」(174)と述べている。この、自らに施される「癒し」に「誘導」性があることに気づき、それを口にするまいの姿は、おばあちゃんを相対的優位に（まいを相対的劣位に）置く力の不均衡に気づき、その不均衡の「本質性」<sup>ネイチャー</sup>に疑念を示して抗う姿といえ、それゆえ、本作品が「自然」なものとして提示しようとしている「癒し」の構造自体を相対化し、その信憑性を問うものであると考えられる。

まいの抗いは、先に引用した場面以前にも、ゲンジさんにはじめて遭遇したときのまいの不快感をおばあちゃんが受け取らず、「あの男をかばうような何か」(25)をにおわせたときの穏やかならぬ気持ちに始まり、成長が「魂の本質」(126)といわれたときの「納得したくな」(126)い気持ちや、まいが小屋の金網に残っていた毛から、鶏を襲ったのがゲンジさんの犬に違いないと考えたのを「妄想」(147)とされたことで抱いた「敵意」(148)というかたちで、しばしば描き込まれているが、どれもがおばあちゃんにいなされ、あるいは「とぼけた顔」(174)でかわされることで、明確な衝突には至らずに終わっている。しかし、衝突が回避され続けると同時にまいが納得し切ることもないため、とりわけゲンジさんに関するおばあ



ちゃんとの見解の相違を通じて、抗いは持続していく。ついには、まいの主張を一向に取り合わないおばあちゃんにまいが業を煮やし、ゲンジさんなんか「死んでしまったらいい」(182)と暴言を吐いておばあちゃんに頬を打たれるに至って、はっきりと衝突のかたちをとり、仲違いを生じさせることとなる。

この仲違いは、他の抗いがまいの不満を解消し切ることはいまでも飲み込ませるのには成功し、関係の悪化につながっていないのに比べ、和解よりも気まずさに比重が傾いた展開を生んでいる点で、大きく異なっている。まいが引越し後の二年間、引きずり続けるこの気まずさは、再訪を果たさないままおばあちゃんが亡くなることで、やがては「もう取り返しがつかないという恐ろしい後悔の念」(200)にまで発展する。これは、おばあちゃんとの仲違い、すなわち「癒し」を「自然」化する力に抗うことによってまいが負った新たな「傷」と捉え得よう。この「傷」の深刻さは、作品冒頭でまいがおばあちゃんが倒れたという知らせを聞いたとき、「回りの世界から音と色が消え」(4)るほどの深い衝撃を受けていることにも読み取れる。一方、ラストシーンに描かれる「封印されていた感覚がすべて甦」(204)るまいの姿には、作品冒頭の衝撃に対応するかたちで、この「傷」への「癒し」が成立する様子が示されている。こうして抗いによって負った「傷」への「癒し」を成立させることで、本作品は「癒し」を入れ子化し、その入れ子化によって、一度は疑われた「癒し」の「自然」さを回復させ、保証し直しているといえよう。

そして、この入れ子化された「癒し」の成立が本作品の主題であると考えられる。先にみた三つの「傷」への「癒し」は、たしかに本作品の大部分を占めているものの、回想部分内部で機能しているに過ぎない。回想／二年後という枠構造からも察せられるが、作品全体に通底するものとして提示されているのは、「癒し」の構造への疑念を示す抗いによってまいが負い、おばあちゃんの死が深化させた「傷」であり、それへの「癒し」の方である。その「自然」さへの疑念を差し挟んだ上で、入れ子化によって再度「癒し」の成立を描いているところに、「癒しの文学」という本作品への評価も由来していると考え得よう。

### 3)「成長」という消失点

しかし、その「自然」さの再保証は、本当にまいの抗い、すなわち「自然」さへの疑念を解消させた上でなされているのだろうか。この点を考えるには、仲違い後の展開において、まいの抗いがどう扱われているかをみる必要がある。

ラストシーンにおける「癒し」の成立へと向かうべく、重要な転換が図られるのは、引越しからおばあちゃんの死までの二年間についての語りにおいてである。そ

ここでは、転校後まいが毎日学校に通うようになり、友人もできたこと、いまも「魔女修行」を黙々と行い続けていることが性急に語られ、二年間に起こったまいの心境の変化についても要約のようなかたちで触れられている。そこに描出されるのは、まいが、おばあちゃんのことを気にしつつ「後悔も反省も今はまだするつもりはない」(196)と自らの抗いの妥当性を感じてもいるところから、抗い続けることが「面倒くさくな」(196)り、同時に抗いを露にしたふるまいのおばあちゃんへの「残酷」(196)さに思い至って罪悪感を覚えるようになる姿である。これはまいの抗いの妥当性が切り崩されていく過程といえ、重要なものだが、しかしさらに重要なのは、これに続く語りにおいて、まいの罪悪感が、自らを自らが裁くというかたちでの判断権の保持から、判断権自体の放棄・おばあちゃんへの委譲へと移行する様が描かれていること——「誘導」性のみせる力の不均衡に抗っていたはずのまいが、罪悪感を負うことによって、抗いの対象であったはずの力の不均衡の容認へと、いつの間にか移行しているということである。

自らの行いの「残酷」さを思ったまいは、「自分がされたことよりも、自分のしたことのほうが、はるかに許しを請うべきことのように思」(196-197)うに至るが、その後すぐさま、そうした自らの心境をおばあちゃんに話せば、おばあちゃんは「まいが安心して夜ぐっすり眠れるようなことを話してくれるだろう」(197)と期待する。ここには「誘導」性に抗うどころか、それに従うことで「安心」を得ようとするまいの姿が読み取れる。しかし、この移行の理由として示されているのは、抗いを保つことの「面倒くさ」さと、おばあちゃんへの「残酷」さを思ったときの「重い気分」(196)だけであり、「誘導」性にみられる力の不均衡の是非自体は検討されていない。つまり、抗いは解消されるのではなく、まいが「面倒くさ」と罪悪感の重さから逃れるため、自らの妥当性を切り崩す力の不均衡を受け入れ、「見えざる手」の庇護下に入って判断権を放棄すると同時に忘却され、なかつたことにされている。従って、「癒し」の「自然」さの再保証は力の不均衡を解消しないまま、むしろ強化させてその「自然」化の力に抗うことを「罪」とし、その断罪の重さによってまいに抗いを手放させ、抗う自らを忘却させることによって行われているのである。

この忘却の必然性の理由として、本作品はまいの「成長」を提示していると考えられる。引越し後の二年間を描く語りには、まいが「後悔も反省も今はまだするつもりはない」(196、強調は引用者)ところから「ようやくまいの想像力の翼がそこまで(引用者注：おばあちゃんへの行いの「残酷」さへ)達する」(196、強調は引用者)まで、というかたちで、その心境の変化を未熟さゆえの視野の狭さからの脱却として描き出す意図がみられる。この語り口からは、本作品がまいの抗いを未熟

さの表れとし、それへの反省を「成長」の証とすることで、抗う自らをまいから抜き取り、忘却させる必然性を理由づけようとしていることが読み取れる。だが、問題は本作品がここで思考を止め、「成長」自体の根拠を提示していないこと、しかもその必然性への問いを根拠を示さないまま封じていることにある。引越し以前を描くある場面において、「成長なんて」「しなくたっていいじゃない」(126)というまいの抗いは、おばあちゃんの「それが魂の本質なんですから仕方がない」(126)という言葉によって、明確な理由が述べられないまま「あきらめ」(127)るよう促されている。ここでは、「成長」は「魂の本質」という<sup>ネイチャー</sup>自然に従ったものとされることで不問の消失点となり、根拠が示されずとも疑い得ないものとして提示されている。この「成長」が、まいが自ら未熟化を受け入れて自身の妥当性を切り崩し、抗う自らを忘却する必然性の理由として差し出されることで、まいは、根拠が示されないにもかかわらず、自らを蝕む力の不均衡を容認することになるのである。

既にみたように、内川朗子は本作品の不登校の解決が「本人（引用者注：まい）の「成長」に寄りかかっている」と指摘している<sup>19</sup>。内川の論自体は不登校にかかわるものとしてのみ提示されているものだが、力の不均衡の容認へとつながる抗う自らの忘却の過程もまた、「成長」として差し出されていることを考えれば、これは不登校のみのことではない。本作品は、作品全体にかかる「癒し」の成立を、「成長」を「本質」化することで作り出した消失点に「寄りかか」ることで成し得るのである。

## 2. 「愛」と「魔女」のミソジニー

### 1) 「愛」の享受と断罪

「癒し」の構造が抱えるこの消失点は、何を示唆するものなのか。この点を考えるには、消失点を作り出した目的が反映されているであろうラストシーンが何を描いているかをみる必要がある。ラストシーンは、おばあちゃんが生前にした、死んだら「本当に魂が身体から離れましたよって、証拠を見せる」(131)という「約束」(204)が果たされていることに気づいたまいが、「おばあちゃんのあふれんばかりの愛」(204)を実感し、引越しのときにはいえなかった「おばあちゃん、大好き」(205)を叫んで、その直後、「心の底から聞きたいと願う」(205) おばあちゃんの「アイ・ノウ」(205)の返答を聞きとるという展開をとる。作品中盤において、「心から聞きたいと願ったもの」(118)を聞きとることが魔女の心得の一つとして提示されていることから、この場面が「魔女修行」の成功を描いていることは明白



だが、ではそのきっかけとなる「あふれんばかりの愛」の実感と、その享受の表明のような「おばあちゃん、大好き」の叫びは何を意味するのだろうか。

重要なのは、この「おばあちゃん、大好き」を、まいが引越しのときには仲違いの気まずさから口にしていない点である。仲違いのもとがゲンジさんへの不信と嫌悪に起因するまいの抗いであることは既にみたが、より正確に言えば、この抗いはゲンジさんへの不信・嫌悪より、その主張をおばあちゃんが真偽も問わずに取り合わず、「わたしよりあの男のほう」(183)を大事にするかのようにまいの気持ちを受け取らないことから来ている。嫉妬心ともとれるこの不満に加え、ゲンジさんへの嫌悪の要因の一つに、彼がおばあちゃんを侮蔑的に「外人」(145)と呼んだことへの憤りがあることも考えれば、まいの抗いはおばあちゃんへの愛に由来し、その愛をおばあちゃんに蔑ろにされることへの抗議と考えられる。もう一つ注意しておきたいのは、おばあちゃんはこの愛に関しては取り合わず、受け取らない一方、「おばあちゃん、大好き」という言葉でまいから差し出される愛については、まいの引越しの際にそう「言ってほし」(194) そうに「訴えるような視線」(194)を送るほど、積極的に受け取ろうとしているという点である。つまり、おばあちゃんはまいから受け取る愛を取捨選択し、限定的にしていると考えられ、まいが「大好き」といえないのはその限定化に抗いを覚えているためと捉えられる。

ここで問題となるのは、まいの抗いはその愛の限定化に対するものであり、おばあちゃんに受け取られない気持ちがあることによるにもかかわらず、ラストシーンでは、まいは「約束」の遂行への気づきという、以前から受け取られていたものが受け取られ続けていたことの確認だけで「おばあちゃん、大好き」と叫んでいる点である。既にみたように、まいは引越しからこのラストシーンまでの二年間に罪悪感を覚えている。そのきっかけが「ああいう別れ方」(196)、すなわち期待を知りつつ「大好き」といわなかったことへの内省とされていること、そしてその断罪に屈して忘却するものが愛の限定化に抗う自らであることは、限定化に従順になることと「あふれんばかりの愛」を享受することが直結していることを示している。ここには、おばあちゃんの「愛」が「あふれんばかり」で「降り注ぐ光のよう」(204)という形容が強調する包容力とは裏腹に、愛のやり取りの限定化を認めさせるべく受け取らせるために与えられる、非常に限定的なものであることが読み取れる。従って、まいの「あふれんばかりの愛」の享受は、まいが断罪に屈して抗う自らを忘却し、愛の限定化に従順になっていることを示すものと考えられる。

## 2) 断罪が奪う声

ここで、この断罪を身に負い続ける者として、ママの姿へと目を転じてみたい。まいがこうして抗いを忘却して「あふれんばかりの愛」の庇護下に入る一方、ママはおばあちゃんとの確執を抱え続けることで、その「誘導」に抗い続けている。本作品がこの抗いを都市／田舎の二項対立構造に組み込み、「自然」化の力を作用させることでおばあちゃんの優位性を作り出していることは既にみた。では、そうして抗いつつも力の不均衡の内に封じられるママは、実際どのようなかたちで力を封じられているのか。まいは、断罪によって抗いを手放すことで「愛」を享受し、わだかまりを解く一方、おばあちゃんの遺体と対面するママの姿を「捨てられた子供みたいだと」「人ごとのように思っ」(199)ている。ここには「愛」の内の庇護／「愛」の外に「捨てられ」た者への断罪という対比が透けてみえるが、では、「捨てられた子供」であるママはどのような断罪を負っているのだろうか。

ママの抗いは、パパ視点が挿入され、ママが以前おばあちゃんの「女の人は家において家庭を守るべきだって考え」に「反発していた」(160)こと、「当時ママがおばあちゃんに押しつぶされそうな気がする、と言っていたこと」(160)が語られることで告げられ、また、ママがまいの不登校を機に「優先順位を考えた」(192)結果、一度仕事を辞める、とおばあちゃんに告げたとき、「考えないと分からないんですか」(192)と返され、それに「これで一切仕事をやめるつもりじゃない」(192)といい返す姿に顕在化している。このいい返しには、抗いととも、おばあちゃんとは異なった自身の生き方への信念が読み取れる。だが一方、それに続く「おばあちゃんのような生き方は私にはとてもできないわ」(192、強調は引用者)という発言には、「おばあちゃんのような生き方」に可能であれば選択すべき「本来」性を認めるとともに、そうできない自らの能力不足を認め、その生き方に落伍性を付与する響きがある。ここには、批判者から落伍者への声のすり替えが読み取れる。これ以前の場面において、おばあちゃんを「本物の魔女」(7)と認めたり、まいへの返答が重なったとき「譲るような表情」(19)でおばあちゃんに返答を委ねたりと、ママがおばあちゃんの優位性を認める姿が描かれていることを考えれば、このすり替えは、ママが力の不均衡を内面化しているために生じたものと捉え得よう。自身を「押しつぶ」し落伍者に変えるものであるにもかかわらず、こうして不均衡を内面化するママの姿には、本作品が「愛」の外で抗う者に与える断罪の痕が読み取れる。ママは、抗いを示し続けるがゆえに断罪を身に負い続け、その生き方の妥当性を主張する声を奪われているのである。

ママ自身がこうして声を奪われる一方、本作品に部分的に挿入されたパパ視点

は、前述のようにママの苦悩を告げ、かつパパ自身の批判の色もにじませており、一見するとこの力の不均衡を緩和しているように思える。しかし、パパ視点の信憑性は、その「想像力の欠如」(168)がまいとおばあちゃんに笑われることで結局は切り崩されており、この切り崩しによってママの声は二重に封じられていると考えられる。藤本恵は、こうしてパパ視点で「おばあちゃんの持つ負の側面」を告げる一方、絶対性も付与されていないことを根拠とし、本作品は「最初に設定した二項対立の一部を解消（脱構築）し、登場人物の考え方や行動を脱中心化して、結局、まいが得た主体性——状況と関わる足がかりになる「自分で決める」力——を浮かび上がらせている」と論じている<sup>20</sup>。しかし、ママの声の二重の封じ込めを考えれば、パパ視点の信憑性の切り崩しが「脱中心化」と呼び得るような力の不均衡の解消につながっているとは到底いえない。また、まいの「主体性」も、まい自身が断罪に屈して抗う自らを忘却し、そのことでママが「愛」の外へと「捨てられ」る様子を「人ごと」とする距離を手に入れた先に獲得されていることを考えれば、問題含みなものといわざるを得ない。まいの「主体性」の獲得は、そう「成長」するよう「誘導」する「愛」の庇護の内から放逐されるママの問題から、切り離せるものではないのである。

### 3) 「魔女修行」のミソジニー

では、こうして断罪し、「愛」の内へと「誘導」することで、本作品は何をなそうとしているのか。「愛」の享受の先に描かれる「魔女修行」の成功とは、いったい何を意味するのだろうか。この点を考える際に重要なのは、ひこ・田中による、「女を巡る物語」である本作品は、その根底に「祖母と母親、母親と娘、その組み合わせに生じている微かな、けれど根源的なノイズ」を抱えており、その母 - 娘間の「ノイズ」の解消のために祖母 - 孫娘の組み合わせに注目しているという指摘である<sup>21</sup>。そうした位置づけの彼女たちの間の愛のやり取りは、本作品においては理想的な母 - 娘の関係性として表象されていると考え得る。そして、吉田純子が指摘するように、「まいの不安や悩みは、彼女個人のことというより、祖母の「魔女的な」生き方がまいの母親に継承されていないことに端を発している」<sup>22</sup>。従って、本作品の「女」たちの「愛」のやり取りは「魔女」性の継承を巡るものであり、その継承はママの抗いによって一度は挫かれた「<sup>ナチュラル</sup>本来の」母 - 娘関係の再生を含意していると考えられる。では、本作品が「魔女修行」を通じて描く、理想的で「本来の」母 - 娘関係とはいったい何なのか。この点を考えるためには、その愛のやり取りにみられる限定化と母 - 娘関係との関連性について考察する必要が

ある。

竹村和子は、精神分析やフェミニズム、セクシュアリティの議論を参照しつつ愛について論ずるなかで、近代家族において機能する母 - 娘関係について考察している。竹村は、愛を「自我形成と対象形成の同時進行性につけられた名称」であるとし、精神分析が近代的「個人」の成立する与件として理論化した、父 - 母 - 息子の間にはたらくエディプス力学の「性器的な近親姦の禁止を「法の一撃」として愛の始まりにおいて到来させる言語が、ペニスという性感帯を特権化し、成熟した愛を性器的なもの——とくに男の性器的なもの——に解釈していく」ことで、「男特有のセクシュアリティ／女特有のセクシュアリティ、また男の身体／女の身体」が生産され、しかも愛の交換が「そのような差異化された二つの性のあいだの出来事——異性愛主義的で性差別的な交換——に矮小化」されると指摘する。そして、その性体制を稼働させるものである近代家族において自我形成を行う際、女兒は異性愛的なエディプス力学に母との愛を禁じられるため、愛の対象としての母を忘却してメランコリー化し、「わたし自身」として体内化することで、いずれ「母」となる「娘」の位置につくという。竹村は、こうして再生産される「母」が性器的かつ非性器的カテゴリーであることを指摘し、「母」が男性器を特権化するエディプス力学の自家撞着を抱え込んでいることを読み取っている<sup>23</sup>。つまり、近代家族の再生産のために必須の「母」の再生産の過程は、異性愛主義的かつ性差別的で女性蔑視を伴うものだということであり、その再生産のために、母 - 娘間の愛のやり取りは限定化され、女兒が母に差し出すことが許されるのは、いずれ「わたし自身」となる「母」への愛のみ、母が受け取れるのは、かつての「わたし自身」である「娘」から差し出された愛のみとなるということである。

本作品のラストシーンにおいて、まいが愛のやり取りの限定化の承服を意味する「あふれんばかりの愛」の享受をきっかけとして「魔女修行」を成功させることを考えれば、「魔女修行」とは「魔女」性、すなわち竹村のいう「母」の体内化を受け入れて「娘」の位置につくことを意味すると考えられる。しかしまいは、「魔女修行」に「誘導」性があることに気づき、その過程において許されない母への愛を抗いによって保持しようとした。断罪は、まいにそのことを悔い改めさせることで「魔女修行」を成功させ、「魔女」性継承の妥当性を示すために本作品が行った操作であるといえる。本作品の抱く消失点は、この断罪の必然性の無根拠さを隠蔽し、根拠なきまま、自らを蝕むミソジニーを伴って遂行されるまいの「魔女」性の体内化を言祝ぐためのものといえよう。本作品は、この「魔女修行」の成功を喜ばしきものとして描くために、「母」の再生産に必須の「娘」から「母」へ、という、かつての「わたし自身」からいずれなる「わたし自身」への「成長」の不可逆の時

間差を<sup>24</sup>、「魂の本質」とすることで無根拠のままでも必然化せねばならなかったのである。

#### 4) 「西の魔女」の死の意味

これまでみてきたように、本作品は抗いを示して「魔女」からずれる者を断罪することで、まいの「魔女」性の体内化を「自然」化し、必然化している。では、それに奉仕し、まいに「魔女修行」を施すおばあちゃんは、ミソジニーを伴う「魔女修行」に苦悩を抱えることはなかったのだろうか。おばあちゃん自身、「肉体を持っている人間なら」(123) 外からの無用の刺激を「無視する」(118) という「魔女」のふるまいを「完璧に遂行するのは無理」(123) と述べているのであれば、彼女自身、ずれを抱え、苦悩を抱いていたはずである。それを明確に示すものとして、まいの暴言に思わず頬を打つ場面が挙げられよう。このふるまいにみられる「魔女」らしからぬ「動揺」(185) は、作中でもまいによって指摘されている。いま一つ挙げることができるのは、ママに「おばあちゃんのような生き方は私にはとてもできない」と言われたとき、「確かにもうオールド・ファッションなのかもしれませんね」(192) と述べ、「寂しそうに微笑」(192) む姿である。この「おばあちゃんらしくない」(193) 気弱な発言には、「魔女」性の継承の妥当性の脆弱さと、「魔女」からずれて生きることの可能性を示唆するようなそぶりが見受けられる。「本物の魔女」(7) として「無視」に長けていればこそ、おばあちゃんは「無視する」対象として「愛」の外を目に映し続け、「母」の自家撞着を飲み下し続けてきたはずである。ここに、その飲み下しの裏でおばあちゃんが抱え続けた「魔女」からのずれへの自覚の生んだ、ずれを修正し続けることへの苦悩を読み取ることは可能と考える。

問題は、そのようなおばあちゃんの「魔女」からのずれが、本来起こるべきではないが「肉体」という未熟さを負う「人間」には避けようのない、それゆえ個人的な失敗とされることで、「魔女」性の継承の妥当性をゆるがすには至らない取るに足らないものとされ、苦悩が眩かれながらも拾われないままとされている点である。先に挙げた二場面の両方ともが、前者は「動揺」を指摘するまいに「そういうこともあります」(185) とおばあちゃん自身が偶発性を強調し、個人的失敗として返答することで、また後者は、ママによってその「おばあちゃんらしくない」さが指摘されるのみで個人の気の迷いとされる以上の展開をみせないことによって、ずれを取るに足らないものとして扱い、その裏の苦悩を封じている。この封じ込めは、おばあちゃんの「動揺」という「止めようのなかった感情の「流出」」(196) を引



越し後の二年間のなかで思い返したまいが、「おばあちゃんだって、魔女である前に人間なのだ」(196)と述懐することで強化され、さらには、苦悩を個人的なものとして胸の内に封じたままおばあちゃんが死ぬことで、決定的となる。どれだけ「無視」に長けていようと、「肉体を持っている人間」であるおばあちゃんは、僅か二度ではあれ、ずれを垣間見せている。まいの抗いによってその「誘導」性に疑念の差し挟まれた「魔女修行」を疑うべくもないものとして提示するために、本作品は、おばあちゃんに未熟な「肉体」を棄て去らせ、「魔女」と同一化させてずれの可能性を除去すること、つまり、おばあちゃんを「西の魔女」として殉教させることを必要としたのである。

おばあちゃんの遺体を前にママが漏らす「この人はこういう死に方をする」(199)という眩きは、この殉教への気づきを示すものと捉え得る。先にみたママの力の不均衡の内面化を、「母」ではない母からの愛を求めて、「魔女」の裏側で押し殺されるおばあちゃんの声聞きとろうとし続けた結果のすり替えと捉えれば、ママが自らの苦悩を媒介に殉教に気づいていることは想像に難くない。「こういう死に方をする」という眩きのすぐ後、まいを部屋から出して一人になったママが響かせる「爆発するような」(200)泣き声は、母を亡くした娘の単なる悲嘆ではなく、メランコリーの奥から響く「西の魔女」ではない母への愛の叫び、すなわち苦悩を飲み込んだまま殉教した母への悼みであり、同時にその殉教によってママの苦悩を聞きとる可能性を永遠に封じたことへの怒りと嘆きの噴出だったのではなからうか。しかし、その母への愛の言葉を、声を奪われたママは言葉にならない号泣としてしか響かせられない。おばあちゃんの死は、その裏で押し殺されたものが悼まれないまま、「西の魔女」の死としてまいの「魔女」性の体内化に奉仕させられるのである。

### 3. 忘却の痕が響かせるもの

#### 1) 「癒し」と「魔女修行」の齟齬

前節では、本作品の描く「魔女修行」とそれにまつわる愛のやり取りが「母」の再生産へとつながり、ミソジニーを伴っていることをみてきた。ここで再び「癒し」へと考えを戻せば、本作品において、「癒し」はまいに近代的な都市生活によって失っていた（本来的）「魔女」性を取り戻させるためのものであり、「癒し」の「自然」化はその過程を必然として差し出すための操作であったと考えられる。つまり、「癒し」という体をとることで、ここでは近代批判と「魔女」性の体内化、すなわち「母」の再生産という二つが結びつけられているということである。しか

し、既にみたように「魔女」性の体内化によって再生産される「母」が近代家族における「母」であるならば、これが近代批判と並び立つことは本来ないはずである。この結びつきはなぜなのだろうか。

この点を考えるには、本作品が批判対象として捉えた「近代」とは何なのかを考える必要がある。前節で触れた竹村和子は、母と娘に起こる「母」の再生産過程でのミソジニーの連鎖を考察するなかで、近代社会において生じている核家族イデオロギーの事実上／理念上間でのねじれを指摘している。竹村は、資本主義社会の進展によって女が消費のなかに取り込まれることで、核家族イデオロギーを支える性別分業が「事実上その存在理由を失っていく」一方、男／女という「近代の自我形成の物語に基盤を与えているセクシュアリティの二分法」が可能になるのは、家族にまつわる社会規制を通してはじめてであるがゆえに、近代を支える性制度を存続させるべく、核家族イデオロギーによる「母」の再生産がいまだ理念としては機能していると述べる<sup>25</sup>。この指摘に従えば、本作品は、前者の資本主義の進展を批判すべき近代性として見出したため、家庭に入らず仕事を続けるママを断罪し、「コンピューターやコピーの情報の山、流れ出るファクスの川が感じられ」（161）るパパの「想像力の欠如」（168）を嘲笑したのであり、他方、それに対置するかたちで「魔女という非近代のシンボル」を描き<sup>26</sup>、近代によって傷つけられたまいへの「魔女修行」による「癒し」という展開をとった。しかし、後者の性制度を見落として批判対象の「近代」を局所化してしまったため、前者への批判が、「事実上」の核家族イデオロギーの崩壊を反動的に憂慮すべき事態として捉え、オルタナティブの模索ではなく「母」の再生産過程の強化を希求することへとつながり、本来並び立たないはずの二つが、その相違・関連性が曖昧なままに結びつけられることとなったと考えられる。

本作品の「女」たち各々が示す「魔女」からのずれは、この二つの癒着状態が奇妙なものであることを暗示するものといえよう。ママの苦悩は言わずもがなであるが、おばあちゃんがふと漏らした「オールド・ファッション」の可能性への不安もまた、竹村の指摘にある事実上／理念上の齟齬への気づきと捉え得る。そして、女だけでなく子どもも消費に取り込む資本主義社会の申し子であるまいは、恐らくママ以上に「事実上」の核家族イデオロギーの崩壊を実感しているはずである。まいの抗いは、「事実上」の崩壊の感覚がイデオロギーの「理念上」の存続に出会うことで生じたものと考えられる。しかし、こうして示される齟齬への気づきは、各々の位置取りの内での個人的な出来事として処理されることで、顕在化しないまま封じられている。既にみたおばあちゃんに加え、ママの苦悩は自らの能力不足のせいとなり、まいの抗いも、一度は明確な衝突を起こしながら、結局は個人の「成

長」の一過程として処理され、「母」の再生産過程に回収されてゆく。まいは、抗う自らを自らから切り離して忘却し、「愛」の外で苦悩するママのことを「人ごと」(199)とする距離を得ることで、事実上／理念上の齟齬のたてるきしみを聞かなかったことにして、「安心」(197)を手に入れるのである。

## 2) 「成長」の通時性を超えて

では、その自らによる自らの蝕みの過程からずれ、齟齬のきしみの音を、「愛」の外で奪われゆく声を聞きとる可能性は、どこにあるのだろうか。重要なのは、忘却したとはいえ、まい自身も一度は抗いをその身に刻み込んでいるという点である。まいが抗いによって負った「傷」への「癒し」は、抗う自らを「無視」(118)して忘却し、「傷」のもととなっている自らを切り離して、「傷」自体をなかったことにすることで成立しているに過ぎない。実際のところ、まいの「傷」は癒されてはおらず、ママの苦悩と同じく「愛」の外へと「捨て」られたために、「愛」の庇護下に入ったまいにはそこから響く痛みの声が聞きとれなくなっているだけなのである。しかし、「肉体を持っている人間」が完璧な「魔女」となることが不可能であるなら、その切り離しが完遂されることはない。聞きとられない声はなくなったのではなく、「無視」されながらも、まいの身に<sup>忘</sup><sup>れ</sup><sup>た</sup><sup>こ</sup><sup>と</sup><sup>と</sup><sup>し</sup><sup>て</sup>刻まれている忘却の痕が、常に響かせているものである。

前述の竹村和子は、母と娘のミソジニーの連鎖を断ち切る術を論じるなかで、「娘」という位置が「母」を既に内包しており、「娘」と呼びかけられるときに、あるいは「娘」という呼びかけを体内化したときに、娘は「母」の道程を歩みはじめている」と指摘し、そのため「母 - 娘の通時的な関係と思われるものは、「母」であり、かつ「娘」であるという二つの焦点をもつ身体のなかに共時的にあらわれているはず」であり、「逆に言えば、「母」「娘」という一見して別個の共時的な実体詞は、そのなかに通時的な時間の重なりを抱え込んでいる」という<sup>27</sup>。だからこそ、この「二つの焦点をもつ身体」に気づき、娘が娘をまなざす母の眼のなかに「母の娘」を見、自らが「娘であるあなたを見つめる母」でもあると気づいたとき、ミソジニーの連鎖を生む「通時的な母 - 娘の物語は、母と娘の心のなかで共時的な出来事に変わる」と述べる<sup>28</sup>。竹村のいう「二つの焦点をもつ身体」による「共時的な出来事」の物語は、まいが、かつてはおばあちゃんにのみ向けて広げた「想像力の翼」(196)を今度はママへと広げ、その苦悩の声を自らから切り離された「人ごと」としてではなく、忘却の痕を通して自らの内に響くものとして聞きとるとき、語られ始めるのではないだろうか。そのとき「魔女」からのずれは、「成

長」によって隔てられ不可逆的に並べられた通時的カテゴリーを超えて、そのミソジニーによって奪われた声を、内からの声であり、かつ外からの声でもあるものとして、まいの身体において共時的に響かせ始めるはずである。

## おわりに

本作品は、ある意味では無防備なほどの率直さで「魔女」性が「無視」によって成立していることを描き、「魔女」性の継承には抗う自らの「無視」という忘却の過程が必要なことを描き込んだ。それを可能な限り縮小せんとしたためか、その過程を示す引越し後の二年間の描写は、それまでの詳述さと比べると性急さと要約が目立ち、まいが結果として得たものだけを示すのみとなっている。ここにも、本作品が作品自体「魔女修行」を遂行し、問題性を視野に入れつつ「無視」し隠蔽していることの表れが確認できるが、そうした操作ゆえに「母」の再生産をほぼ無批判に肯定してしまっていることは、本作品の致命的な問題点といわざるを得ず、この点はいくら強調してもし過ぎるということはないだろう。

しかし、「無視」というかたちで表れた問題性への自覚ゆえ、本作品は、忘却されるものとしてまいの抗いを描き、まいが「二つの焦点をもつ身体」をもつ契機を瞬間的にではあれ描き込んでいる。もちろん、その表れ方によってこそ問題が生じているのであり、これが本作品の問題点を弱めるとは到底いえまい。しかし、この奇妙な率直さによって、本作品は、そうして拠りどころを空洞化せねば正当化し得ないほど、「母」の再生産が「自然」なものではないことを示してもいる。「母」の再生産を喜ばしく描き、ミソジニーの連鎖に加担する本作品にもし評価し得るものがあるとすれば、それは——その裏のミソジニーを隠蔽すべく機能する「癒し」でも、またミソジニーを伴った「魔女」性の体内化の果てに得られるまいの主体性でもなく——「魔女」性を、それにそわないものを「無視する」という反復行為の結果として描き、「魔女」性の体内化へと向かう「成長」を忘却の過程の刻まれたものとして提示することで、「二つの焦点をもつ身体」に響く声を、忘却の痕に封じられたものとして、限りなく縮小させつつも描き込んだ点にあるのではないだろうか。

## 註

- 1 1996年には小学館より新装版が出版されている。本論文で使用しているのはこの新装版であり、引用ページ数はすべて同書（小学館1996）による。

- 2 第28回日本児童文学者協会新人賞、第13回新美南吉児童文学賞、第44回小学館文学賞を受賞。
- 3 たとえば鈴木宏枝「癒しのリアリズム・おばあちゃんのファンタジー」『季刊ぱろる』第5号、1996、pp.226-233。西山利佳「〈共感〉の現場検証：『夏の庭』『宇宙のみなしご』『西の魔女が死んだ』に感動したあなたへ」『〈共感〉の現場検証：児童文学の読みを読む』くろしお出版、2002=2011、pp.46-51。「癒し」と呼ばないものの、不登校の解決・そこからの回復を読み取るものとしては、内川朗子「児童文学にみる不登校へのまなざし：『西の魔女が死んだ』を中心に」『日本児童文学』第51巻第5号、2005、pp.16-20。根本眞弓「『西の魔女が死んだ』に見る不登校を呈する思春期女子の心理：精神分析・対象関係論の観点から」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第4巻、2014、pp.23-32など。
- 4 石井直人「『タブーの崩壊』とヤングアダルト文学」国立国会図書館国際子ども図書館編『平成17年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「日本児童文学の流れ」』2006、pp.77-79。沢崎友美「『自己物語論』の視点から児童文学を読む：〈読みかえの物語〉としての『西の魔女が死んだ』を中心に」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』第XII号、2009、pp.69-70。ひこ・田中「自覚する物語たち」『日本児童文学』第41巻第11号、1995、p.30。この指摘は次節でみる「癒し」の入れ子化を示唆するものと捉え得る。
- 5 石井、前掲書、pp.77-79。
- 6 西山、前掲書、pp.46-51。この指摘は次節でみる「癒し」の「自然」化を示唆するものと捉え得る。
- 7 内川、前掲書、p.19。
- 8 高田桂子「おばあちゃんには大事な役どころがある：『木かげの家の小人たち』×『西の魔女が死んだ』」『日本児童文学』第51巻第3号、2005、p.45。
- 9 奥山恵「ひとは何になるのか」『〈物語〉のゆらぎ：見切れない時代の児童文学』くろしお出版、2002=2011、pp.115-116。
- 10 ひこ・田中「自覚する物語たち」『日本児童文学』第41巻第11号、1995、pp.30-31。
- 11 きどのりこ「ジェンダーによる差別の軽やかな無化を目ざして」『日本児童文学』第41巻第11号、1995、p.22。
- 12 沢崎、前掲書、pp.55-74。
- 13 藤本恵「自分で決める：『西の魔女が死んだ』の描く主体性について」『児童文学研究』第38号、2005、pp.31-43。直接引用箇所はp.41。
- 14 ひこ・田中、前掲書、p.31。